

二〇〇八年度大会シンポジウム

感情と共同性

感情をめぐる問題は、これまでは、感情に独自の働きや役割を認め、それをそれ自体において取り上げるといふよりは、どちらかと言えば、理性や意志との関連で論じられるというケースが多かったように思われる。言い換えれば、それはあくまでも能動に対する受動という扱いでしかなかった。しかし、ここではむしろ、この関係を離れ、広くパトスのなものに独自の働きを認め、感情をそれ自体において問題にしてみたい。その際われわれは、少し観点を變えて、共感や同情といった言葉が示すように、人と人とを結びつける共同感情の観点から、相互主観性の原理としての感情に注目し、それを共同性や社会性との関連で取り上げることにする。

当面の出発点は、「精神分析の系譜」におけるミシェル・アソリの次の言葉である。「ショーベンハウアーが共同体と呼ぶもの、集団や結合という共同的現実存在の主要形態は、二つの種類に分かれる。知性に基づく純粹に「形式的」な共同体に対

して、「実質的共同体」、すなわち情感的本性からなる家族や階級などのような実在的な共同体が対置されるのである」。この後アソリは、ショーベンハウアーの一文、「このような種類の結合において本質的なものは感情なのである」という一文を引いてさらに続ける。「恋人同士の互いに交わす眼ざしの動機といたつたような恋愛的生に關する明確な問題はこれまで問題にもならなかったが、特殊ではあるがもつとも重要な問題であり、詳しく展開される長い論述の対象になる」。アソリがここでショーベンハウアーの言葉を引きながら述べている問題は、きわめて重要である。今、二つの共同体が区別された。形式的な共同体と実質的なものである。ここでのわれわれの問題は、言うまでもなく、別な言葉で「実在的」とも呼ばれた、情感的本性からなる後者である。

このシンポジウムでは、十八世紀から現代まで、いわゆるヨーロッパ近現代の思想を代表する三人の思想家、アダム・スミ

ス、ルソー、そしてアンリの考え方を取り上げ、「感情と共同性」というテーマに沿って、相互主観性の原理としての感情という問題をそれぞれの観点において追求する。ごく簡単に内容の一端に触れるならば、ヒュームとの比較においてスミスの道徳感情の問題を取り扱う島内明文会員の発表は、他人との関係の成立原理である「共感作用の反復を通じて社会秩序が漸進的に成立する」とされる「自生的秩序論」が取り上げられる。続いて、吉永和加会員によって、ルソーにおいて、共同体の形成や他人との結びつきに関して感情の果たす役割が強調され、「憐憫の情」や「共感」や「愛」による共同体が問題になるが、ここでは、現代の共同体論につながる注目すべき問題が取り出されることになる。ルソーの場合、感情の共同体は閉じた共同体となり、「支配関係」に転化するのではないかという疑いである。しかし、この論点は従来の対称的な他者関係論から非対称的な他者関係論への移行を示すものでもあるという点で逆に現代の問題と強い関連性が認められる。最後に、松島哲久会員によるアンリを中心とした現代フランス哲学における共同体論の検討であるが、ここでは、アンリの「根源的受動性としての自己触発を通して感情性と生と共同性をひとつに繋ぐ論理」が提示され、感情と共同性をめぐる議論に一つの結論が出される。しかし、松島会員の発表はそれにとどまることなく、レヴィナスが「時間と他」において示した「共通性なき集団性」、またバタイユを始まりとする「共同体をもたざるもの共同体」、

いわゆるネガティブな共同体論の構想にも触れ、感情と共同性をめぐるスミス、ルソー、そしてアンリの議論の問題点を裏面から照射することにもなる。

以上の議論を通して、われわれは、感情が社会の形成や共同体の形成においてきわめて重要な役割を果たしていることを認めることができるはずである。他人との関係は決して認識上の関係ではなく、それを考えるべき場所は愛や憎しみを初め、今やバトスの経験でなければならぬ。また、同じくバトスの経験を出発点として、共同性や社会性を考えることが必要である。

(庭田茂吉)